

Ⅲ. 救護活動記録

1. 長浜赤十字救護班第1班 (平成23年3月11日～14日)

医師：中村誠昌 (班長)、田畑貴久

看護師長：赤井信太郎

看護師：富岡康弘、大家達弥

主 事：中村正志、弓削正史、奥村能久 (滋賀県支部)



【中村班 (中村誠昌 赤井信太郎 大家達弥 中村正志) 活動報告】

3月11日

発災後救護班待機命令

16:30 救護班出動命令

20:20 長浜出発

北陸自動車道で不足資材補給するが、足りず給油と資材目的で新潟市に下車
車中泊

3月12日

01:04 糸魚川通過

02:33 米山SA休憩・出発

03:30 新潟市内で給油・資材の補給

04:16 信越周囲で地震発生

滋賀県支部と相談し新潟県支部への移動命令

磐越自動車道経由東北高速道路走行し福島市へ

05:00 新潟県支部に到着 そのまま待機、医療ニーズは無いとの事で目的地変更

06:00 福島県支部の指示で福島県相馬市へ向け出発

08:30 新鶴通過安積PA到着 郡山から路肩のうねりひび割れ発生しはじめる

10:38 10万人の避難民が福島市で発生の情報あり

10:49 福島IC下車 携帯電話不通 ソフトバンク社のみ繋がった

12:20 福島県相馬市役所に到着 昼食・現地職員とミーティング
(相馬市役所よりお弁当・飲み物いただく)

12:50 第1班を2チームに分け各々救護所で仮設診療所を設営

13:40 はまなす館 (救護所) 到着 器材搬入開始

14:15 診察開始

18:00 診察終了

19:00 福島県支部より原発の爆発にともなう放射線汚染が
拡大しているため

相馬市より撤退指示あり

20:05 福島赤十字救護班チームとともに川俣町へ出発

済生会川俣病院に到着

休息 (相馬市役所より夕食に牛丼と果物差入れ、済生会よりおにぎり・味噌汁差入れ)

川俣町役場 (現地対策本部) にて情報収集・活動計画相談

20:25 福島班と合同し3チーム編成

23:30 3チームで計7箇所の避難所を分担して巡回診療へ出発

3月13日 中村班巡回診療終了 (川俣小学校等約1200人)

00:30

巡回診療より済生会川俣病院にもどり活動終了

07:00 就寝 済生会川俣病院検診控え室にて寝袋でねる 夜食カップラーメン

08:00 起床

09:30 朝食・ミーティング (済生会よりおにぎり・味噌汁差入れ)

10:00 川俣町役場 (対策本部) とミーティング

滋賀県支部チームを2チームへ編成

1チームは避難所へ巡回診療出発 もう1チームは済生会川俣病院支援
(外来診察・受付・診療介助)

12:00 済生会川俣病院にもどる

13:40 昼食・ミーティング (カップラーメン、済生会よりインスタントコーヒー差入れ)

15:40 二本松男女共生センターへ出発

16:20 放射線量測定

17:09 福島県支部へ出発



- 19:10 福島県支部へ到着・ミーティング・夕食（缶詰・カップラーメン）
- 22:30 撤退命令
- 23:27 帰路へ 衛生材料・食料・器材を福島県支部に寄付
車中泊（東北自動車道→磐越自動車道→北陸道経由）

3月14日

- 00:05 大津赤十字第1班に状況報告
- 02:30 黒崎PA到着・給油
- 03:05 黒崎PA到着・給油出発
- 03:40 北陸道にはいる
- 04:05 米山PA到着
- 04:40 上越ジャンクション通過
- 05:20 越中境到着
- 07:10 徳光SA到着 朝食・ミーティング
- 08:10 徳光SA出発 大津赤十字と長浜赤十字に活動報告
- 08:50 大津赤十字に追加報告
- 09:10 南条PA給油・出発 杉津PAで休憩待機
- 09:50 杉津PA出発
- 11:00 長浜赤十字病院到着 記者会見

【田畑班（田畑貴久 富岡康弘 弓削正史 奥村能久）活動報告】

3月11日

- 14:46 発災 DMA T待機指示
資器材、個人装備準備のため一旦帰宅
- 16:05 DMA Tより参集拠点のメールが入る
- 20:05 日赤救護班として出発

3月12日

- 03:30 黒崎出発、新潟で救護班の食料などの買出しをする。
ラーメン、お茶、水、コップ、紙皿、割り箸、缶詰、菓子、にんにく、カセットガス、電池、ラップ、ティッシュ、トイレトペーパーなど
- 04:16 緊急地震速報 新潟県で地震発生 新潟県支部へ行くよう指示
- 05:00頃 新潟県支部到着。ガスコンロ、敷物7、寝袋6拝借する。
- 06:00頃 新潟県支部出発
- 14:00 相馬市到着 市の幹部より避難所の診療を依頼される。心のケアもお願いされる。
中村班（赤井、大家、弓削、奥村）、田畑班（富岡、中村正志）の2班に別れて避難所に救護所開設する。当初予定の場所には福島赤十字の救護班が診療にあたる。
田畑班向陽中学の体育館用具倉庫に診療室を開設し、診療にあたる。中村班ははまなす館にて救護所開設。
田畑班救護所での活動
高血圧の患者が多い。（発熱クラスにインフルがいたと）常用薬の処方希望する人がほとんど。薬を取りに帰った人は津波にのまれたと。
感染症、インフルなど公衆衛生活動が必要
パーキンソンの患者など難病や寝たきりの人は市の職員に入院や病院受診を勧めてもらう。
保健師の活動
外傷、4名（靴ズレ、足関節の捻挫？母子で天井が崩れてきて前額部の擦過傷と上腕の打撲）
終了間際に息子を津波にのみこまれて亡くした母親がパニックになって泣き叫んでいる傷病者を1名介抱する。心のケアが重要
- 17:18 金澤Nsより、放射能汚染の可能性があり、川俣町に移動するよう指示が出たとの連絡が入る。
福島班が田畑班のところへ来て退避するよう伝達に来る。
中村班へ無線にて退避指示が出ていることを伝える。携帯が使えない。無線が唯一使用可能で伝達に難渋する。
- 20:25 川俣町の避難所1000人位の巡回診療を実施。双葉町、浪江町、富岡町の避難民
田畑班に福島日赤のNs1名を加わる
高血圧、糖尿病（インシュリン希望針をつけて使いまわしている）喘息。針廃棄BOXなど必要
乳児の授乳も体育館で・・・プレイションはない
食堂？には、椅子で休んでいる高齢者多数 DVTのリスク高い
駐車場の車中で休んでいる避難民多数

3月13日

- 0:30 もう1ヶ所の避難所へ行くが、広島県がすでに救護所を開設しているため、川俣病院へ帰院する。福島班より、昨日避難してきた富岡町の避難民の中に被曝者がいた可能性があり、二本松で汚染しているか調べることが出来る旨を伝えられる。
福島県支部は撤収、大阪支部は活動を続けるよう指示
昨日は、富岡町の人とは接触していないため、川俣病院にとどまる
- 12:50 マットにシェラフで就寝
- 07:00 起床 朝食
- 09:06 中村班は支部の指示が出るまで巡回診療、田畑班は川俣病院の要請があり、Dr が渋滞で出勤してくるまでの間、外来診療をする。
富岡は外来で問診、双葉町、浪江町がほとんどで、常用薬の不足、アトピーがひどくなった。市の職員の家族が本人は市の業務で忙しくて来院できないので薬のみほしいと希望される。
岡山県支部が到着しミーティング。放射能の問題、高知班が2次被曝したかも知れないとのこと。岡山班は川俣病院で待機。
- 11:30 双葉町の住民にはヨード剤が配られた。岡山班よりあまり接触しないようにといわれる
- 13:40 被曝したかもしれない双葉町の避難民が4000～5000人川俣町へ避難して来ている。この時点で全国の避難民は10万人との情報。
岡山班が福島医大と連絡し、検査器具とともに川俣へ向かうと連絡はあるが、福島県支部の指示により二本松男女共学センターへ、放射線検査をするために出発することに決定。
外来受付番号は178まで確認
- 14:00 出発 福島班の誘導で二本松へ向けて出発。
岡山班は福島医大が到着するまで川俣病院で待機する。
広島DMA T、広島大、自衛隊により放射線チェック。全員クリアー
- 17:09 福島県支部へ向けて出発
- 19:10 福島県支部到着 食事とインターネットで情報収集 避難民は20万人
- 20:45 撤収決定
- 22:58 福島県支部に物品提供
お茶、水、トイレトーパー、缶詰、カセットガス、キッチンペーパー、コップ、紙皿、プラ手袋、ティッシュ、ウェットティッシュ、電池など
- 23:27 長浜へ向けて出発

3月14日

- 徳光SAで食事
- 09:36 杉津PAでミーティング
- 10:50 長浜赤十字病院到着 記者会見 事後調整
- 16:00 帰宅



【次の救護班への連絡事項】

看護係長 大家達弥

出動準備 主事とあわせて看護師も情報収集
個人装備を整え、所定の場所に集合（下記参照）
医師および看護師長の指示の下に、医療セットや救援資材の準備（救護班とDMAT資器材）
先発隊との情報交換
勤務調整：上司や家族への報告

救護業務の遂行

1 看護技術を応用しての適切な処置・保健指導

（救護所）

現地の市職員もしくは保健師と情報交換して医療ニーズを把握
市の依頼により救護所を開設。開設場所は市の職員に誘導してもらう。
可能なら市の職員と合同で診療を行う。方言が強く把握しにくい。院外処方や入院依頼なども
院外処方は可能か、医療機関は動いているのか搬送手段はあるのか、ベットなどあるか
洗浄などする上水道、ライフラインは使えるのか、使っていないのか、場所の確認
診療介助

（避難所などの医師と同行しての巡回診療）

現地の市職員もしくは保健師と情報交換して医療ニーズを把握
老人福祉センターなどからの避難者など見てもらいたい人を市職員からきき優先的に診る
常に移動しながら診察して行くためカバンをもっていく、物を把握してないと時間がかかる

2 被災・避難者の精神面・身体面両方からの処置

- ・診療所での治療後、被災者への処方箋なり、薬の説明
- ・看護師のみで避難所内をまわり、メディカルチェックをおこなう。必要に応じ救護所へ案内
- ・被災者・避難者からは歩み寄りが少ないため積極的な声かけが必要
- ・電気が暗くわかりにくい必ずライト・無線を携帯
- ・いろんな質問を受けるが、市の職員にまかせ時間のかかる対応はさける
- ・避難所を統括している災害対策本部（市）の場所を把握しておく
- ・点滴は管理に時間がかかるため、必要以外はしない、避難時の事を考えるとしないほうがベター

3 防疫対策

- ・現時点（3/12）での必要性はあまりなく希望者にマスクをわたす
- ・現場の応じた対応を、マスクなどの衛生材料は限界があり必要な物は市職員へ

4 患者票の記入

医師の診察には救護記録を使用。なければA4用紙で代用した。
処方箋はカルテとは別にして発行し渡す。メモ帳を処方箋とし、市の職員へ調剤薬局の説明をしてもらう
記入したものは保管し持ち帰る。

5 医療資器材の取り扱い（合理的・経済的・有効的な保管・整理）

器材は出動前にチェックしているので現場でのその度チェックはしない
無線や運転時のナビの操作 携帯エコーも持参している
保管は緊急車両内になるため車の鍵の管理はしっかりと

救護活動の終了

医療資器材の整理 ごみ、特に感染性廃棄物の扱いは注意
記録の整理 個人情報のため扱い注意、通し番号をつけて数のカウント
（時間を記入して番号としても把握できる）
清掃、汚物の処理
翌日活動のためのミーティング

個人装備

身分証明書	体拭きの紙タオル	ビニール袋
運転免許	タオル	食料
現金	防寒・着替え	おやつ
筆記用具・ノート	雨具	ウエストポーチ
洗面用具	ティッシュ	軍手・軍足
歯ブラシ、歯磨き粉（代用品としてのガム）	ペンライト	防寒用手袋
嗜好品（リラックス用品）	携帯電話	電話・カメラ充電器

常備薬（ロキソニン 鼻炎薬等）
アイマスク

デジタルカメラ
500ml 程度保温できる水筒
首枕

※注意事項

- ・ 現地調達可能であるが実際問題資材不足で調達不可能
- ・ カバンは私物もしくは救護班のカバンでok
- ・ 1班は途中で個人装備の物品（食事等）は購入可能であるが水やカロリーメイトなどはすでに品切れ
- ・ 携帯できる小型のリュックサック
- ・ はさみ等を入れるポーチ等でも可



救護活動を振り返って

看護係長 大家 達弥

やっぱり疲れている時のコーラはうまかった。

その日常に溢れる『うまい』がここまで申し訳なく思ったのも初めてだった。

被災地から帰る途中、いろんな思いを胸にコーラを飲む自分の目からは涙が止まらなかった。



3/11 14:46 頃会議中の僕は『ん？めまいがする、ほっときゃいいやろ』そんなこと思っていたら災害が起こったと知った。同日の20時には現地に出発。わいわいしゃべりながら出発したのが、会津若松を越えたあたりから、高速道路は歪み、割れ、道がずれる。非日常的な空間に入っからは最初のにぎわいも消えていた。

現地に入り市役所へ到着の報告に・・・、かしこまった気分など入った瞬間に崩壊。廊下には救援物資、家族を捜す人。役所の人はソファで倒れるように眠り・・・明らかに機能していない。そんななか偉い人から現地の被災状況と活動内容の打ち合わせがあり、避難所へ向かうことに。

とてもいい天気でした。なのに土はぬかるみ雨上がりのようだった。『内陸で津波はここまで来てないの?? (あとからそれが液状化現象だとわかった。)] 見た目には家屋の損傷も目につきはっきりと地震の爪痕を感じ取れた。

指定された避難所に到着後、仮設救護所を開設。夜は避難所に巡回診療へ。地域の体育館・公民館など数箇所巡回。どこもかしこも環境は悪い、昼間の暑さがうそのように冷え込み、暖房器具もない暗いところで寄り添うように非難している人たち、当時は、1人に1枚の毛布はなく、食事でも子供と老人のみを対象として2人で1個のおにぎりしかなかった。あわただしく進む救護活動のさなか、目の前の



非日常の光景を考えるヒマはなかった。書きつくせない事が沢山あった。

様々な過程を経て撤退が決まり、帰路へ。『まだやれる、まだできることはある』など悔しさを感じつつ、東北地域から抜け北陸地域の新潟に入り始めた頃。僕だけではなくチーム全体が一度に疲労しはじめた。何かしらの緊張が緩み始めたんだらう、こまめに休憩を取りつつ朝食をとるために石川県の徳光 SA で休憩となり例のコーラを飲む事となる。

活動中は把握できなかった災害の全体像をテレビの映像をみて『ああ、あそこについてたんか』と唾然となった。そこに現地での溜め込んでいたジレンマが溢れてきた。

「炭火焼き鳥丼 ドリンクセットのお客様あ」自分が注文したものができて、大好きなコーラを付けてもらった。久しぶりの温かい陶器の食器で食べる食事。思い返せば、茶と水しか口にしてなかった。うまかった。とつてもうまかった。これがスイッチとなり泣きつづけてしまった。日常に帰った安堵感と日常がある喜び、帰れる日常がある幸せ、夜の巡回診療で劣悪な環境に今も居続ける被災者に対し、自分だけ喜びに浸っている罪悪感。申し訳なくて、申し訳なくて・・・自分だけ・・・

ひとしきり泣きつくし、朝食も食べ落ち着いた。

個人の思いだけではやっていけない。チームとして赤十字として組織を意識して役割をもっている。頭では痛いくらい分かっている。でも心はそう反応しない事がよく分かった。

また次に災害に行く時は気をつけつつ、経験を後輩たちに伝えていこうと思う。